

第26回新人シナリオコンクール応募作品

ラストラブレター

鈴木紳介

登場人物表

伊藤栄子	(2 2)	不動産店の新入社員
山科 椎	(2 2)	大学生・イチヤキヤバ嬢
徹	(2 8)	椎の彼氏・ヒモ
山本 毅	(2 8)	栄子を想う不動産店店員
橘 夏樹	(2 2)	栄子の彼氏
碓 努	(4 6)	不動産店の店長
五十嵐愛	(3 7)	不動産店の店員
早乙女	(3 0)	イチヤキヤバ店の女店長
伊藤彰子	(4 4)	栄子の母親

三重の大豪邸・栄子の部屋（夕方）

段ボールが並ぶ広い自室で引越しの準備をしている伊藤栄子（22）。

母親の彰子（44）がおせっかい。

彰子「女の一人暮らしなんて大変なんよ」

栄子「分かってる」

彰子「東京で、何あるか分からんから」

栄子「せやから大丈夫やて」

栄子、押入れから服を取り出し、畳んで詰める。

彰子、ひとりごちるように

彰子「猪瀬さんとお話、そない悪うなかつたかなあ」

栄子「（笑い）猪瀬さんやダメ言うたの、誰？

一回ぐらい社会出ないと工工奥さんなれんで、お父さんも言うてたやん」

彰子「母さんは言うてへん」

彰子は畳むのを手伝おうと身を屈め服に手を伸ばすが、栄子に止められる。

栄子「自分で出来るから」

諦めて立ち上がる彰子、去り際に

彰子「辛うなったら直ぐ帰ってきい。どのみちこつちで結婚するんやから」

栄子は振り向かず笑みを浮かべ

栄子「分かつてるよ」

一人になった栄子、本棚の方へ。

その中に高校時代の卒業アルバムがある。懐かしそうに眺めていると、卒業アルバムに挟まっていた一枚の写真が落ちてくる。

卒業式での同級生・山科椎との２ショット写真。

ト写真。

栄子、じっと眺める。

タイトル「ラストラブレター」

ラグアパ不動産・店内（数日後・午前）
こじんまりとしたチェーン不動産屋の支店。

栄子、店長の碓努（４６）と古参店員・五十嵐愛（３７）、若手の山本毅（２８）

の前で

栄子「伊藤栄子です。よろしくお願いします」
と言いつわるや、しつかりとしたお辞儀
をする。

碇店長「店長の碇です。こちらは五十嵐さん
と山本くん」

五十嵐は笑みを浮かべ挨拶をし、山本は
たどたどしく会釈をする。

碇店長「これでようやくウチにも看板娘が出
来たな」

五十嵐「あれ、私は違うんですか？」

碇店長「君はもうウチの重鎮だから」

五十嵐「あら店長、随分な言い方で」

仲が良さそうな雰囲気に栄子は安堵の笑
みを浮かべる。

山本は何も言葉を発しないが、栄子をま
じまじと見ている。

× × ×
店内から見える給湯室に碇店長と五十嵐
がいる。

五十嵐「新入社員がいきなりウチみたいなお
さい店に来るなんて珍しいですね」

碇店長「彼女のお父さんと社長がイイ仲だね。
それで結婚までの間、適当に預かっ
といてくれって」

五十嵐「お嬢様ねえ。うらやましいんだか、
かわいそうなんだか」

と店外で窓を拭く栄子を見る。

椎のアパート・内（数日後・昼過ぎ）

狭いワンルームの一室。

小さなテーブル上に食べかけの弁当や飲
み物が無造作に置かれている。

部屋の面積の大半を占めるベッドの上で
まぐわっている山科椎（22）と徹（2
8）。

やがて行為が終わり、椎はテーブルにお
いてあるキャスターを取り、火を点ける。
それを見た徹、目配せする。

椎は吸いかけのタバコを徹に渡し、自分

は新しいタバコを取り出し、また火を点ける。

徹「おまえ、今日は？」

椎「夜からバイト」

徹「大学行けよ、留年生」

椎「徹も、いい加減働けば？」

徹「（無視し）椎が卒業して一流企業にでも入ったら俺も安泰なのに」

椎「…腹立つ」

言い終わるや椎、シャワーを浴びにバスルームへ。

椎がいなくなり徹、服を着る。

ベッドから立ち上がると椎の財布から札を何枚か抜き玄関へ。

椎の声「ちよつと！ いい加減にして！」
バスタオルを巻いた椎が出てくる。

徹「首、回んねえんだよ」

椎「ふざけんな！ 生活費もあたしが出してるでしょ！」

徹「いいじゃん、お互い好きなんだから」

徹、キスしてごまかそうとするが椎は応じない。

椎「……もうイヤだよ、あんな仕事」

徹「金いるって言ったから紹介したんだろ」

椎「誰のせいだ！ 返せ！」

と掴みかかるが徹、椎をいなす。

椎「学生の女から金取って、楽しいの？」

徹「（笑い）もう半分、娼婦じゃねえか」

椎、テーブルの上にある中身の残る弁当を投げつける。

徹「汚ねえ！」

はしやぎながら避け、徹は出ていく。

イチャキヤバ「ラブタイム」・店内（夜）

キヤバクラよりも密着度が高い、イチャキヤバ。

キヤミソール姿の椎が接客している。

客のサラリーマン、くわえたタバコを灰皿にもみ消す。

椎、すぐに新しい灰皿に変えようとする。

客「（その椎の手を取って）綺麗な手だね」

椎「……ありがとうございます」

客が馴れ馴れしく椎の体を引き寄せ、胸に触れる。

客「この後、ウチ、来なよ」

と椎の耳元に口を近づけ、愛撫する。

椎「店長に怒られちゃいますから」

客「本当は感じてるんだろ？」

と客は椎の太ももにあてた手を滑らせパ
ンツの中に入れようとするが、椎はその
手を掴み

椎「ダメですよ、それはサービス外です」

客「（強引に迫り）いいじゃん、な？」

椎「ちよつと！」

椎が声を荒げると強面のボーイが来る。

ボーイ「そろそろお時間ですが、お会計を」

ボーイ、丁重に客を椎から離す。

苛立った様子の椎のもとにやって来た女

店長の早乙女（30）。

早乙女「もう今日は帰っていいから」

椎、無言で奥に消えていく。

出先での仕事を終えた道

歩きながら栄子、携帯で山本に直帰する旨を伝える。

横断歩道の前に差し掛かると、青信号は点滅中。

ゆっくりと歩く栄子の肩に、後ろから小走りで来た椎がぶつかる。

椎は何事もなかったかのように追い越していく。

しかし椎の目の前を車が横切り、渡れず信号待ち。

栄子、しばし椎の後ろ姿を見ていると視線の気配に気がついた椎が振り返る。

椎、怪訝な顔で栄子を見つめ返す。

栄子「……椎、やる？ 覚えてる？」

椎「……栄子？」

栄子「久しぶり。凄い偶然やね」

椎、栄子をまじまじと見つめ

椎「栄子、全然変わってないね」

栄子「椎も変わってへんよ」

椎「地元にいた時はこんな化粧濃くなかったわよ。それに標準語、喋ってへんかったわ」

×

×

×

肩を並べて歩く二人。

椎「不動産屋？ 家、エライ金持ちやったよな？ 働かなくても工工んやないの？」

栄子「このままやとすぐお見合いさせられるから、社会勉強や言うてなんとか東京出てきた」

椎「お嬢やなあ、やっぱり」

栄子「椎はどこ勤めてるん？」

椎「留年した」

栄子「え！ ウソやる？」

椎、表情を変えず、無言のまま。

栄子「そうなんや……」

椎「学費出さなあかんから、バイトばっかや」

栄子「そうなんや……」

しばし沈黙し、栄子は所在ない。

椎「（察して）無理に喋らんでもエエよ。あんたとは中高同じやったけど、そんなに話さへんかったし」

栄子「……椎はウチらのアイドルやったからなあ」

椎「なんやそれ」

栄子「だって本当やない。男の子、みんな椎が好きやったもん。女の子にも人気あったし。よう話せへんかったわ」

椎「栄子は……おとなしいお嬢様いう印象しかないなあ」

栄子「ねえ、知つとる？ 中高ずっと同じクラスやったの、私たちだけなんよ」

椎「ほんま？ よおそんなこと覚えとるな」

二人はいつの間にか、もう駅近くにいる。

栄子「……ほなね。今度ご飯でも食べよ」と椎に名刺を渡す。

椎、それを受け取り、何か言いたげに栄子を見る。

栄子「？」

栄子のマンション・リビング

モノは少なく、広々としてモノトーンで
落ち着いたフローリングの2LDK。

栄子に連れられ中に入って来た椎。

椎「（見渡し）さすがやな」

栄子「部屋は自分で探す、言うたんやけど」

椎「やっぱり三重の豪族は違うわ」

栄子「やめてや」

二人、コンビニ袋をテーブルに置き、奥
へ。

同・空き部屋／リビング／台所

二人、ほとんど何も置いていない空き部
屋にやって来る。

栄子「この部屋、空いとるから好きに使う
て」

椎「悪いな」

栄子「全然。一人暮らしってさびしいから。

さびしい？」

椎「男と住んどるから煩わしいわ」

栄子「……喧嘩でもしたん？」

椎「色々あるんよ。とりあえず何か飲も。部屋で寝転がりながら飲まん？」

椎、部屋を出てリビングに置いたコンビニ二袋を取り、隣の栄子の部屋に向かう。

椎の声「ごめん、灰皿ある？」

栄子「吸わへんからなあ……あ、ちよつと待って」

栄子、空き部屋を出て台所の隅の戸棚へ。目一杯背伸びをして腕を伸ばすも、栄子の背では届かない。

横から椎の手が伸び、戸棚を開く。

中にある大皿のガラスの灰皿を取り出す。椎「お客用にお母さんが入れといてくれとい

たやつ、やんな？」

同・栄子の部屋（深夜）

本棚とベッドがあるくらいの広々とした部屋。

灰皿には吸い殻が溜り、ビールとチュー

ハイの空き缶が数本、床に置いてある。
ベッドに腰掛ける栄子を尻目に、椎は本
棚を覗いている。

椎、その中から卒業アルバムを見つける。
椎「懐かしい！ わざわざ持ってきてんや！」
ページをめくると、間に挟まっていた数
枚の写真の中に椎と栄子の２ショットが
ある。

椎「こんな撮ったっけ？」

栄子「私がお願いして撮ったん覚えてへん？」

椎「全く覚えてへん」

栄子「椎、後輩の子にもねだられてよう写真
撮られとったからなあ」

椎「なんで撮ったん？」

栄子「なんでって……アイドルやったし」

椎「やめや、もう。昔がアイドルなら、いま
は落ちたもんやな」

椎、新しくチューハイを開ける。

栄子「お酒、好きなんやね」

椎「栄子は飲まんのか？」

栄子は開けた缶の梅酒をチャプチャプと
させながら

栄子「弱いんよ。椎がうらやましいわ」

椎、タバコに「ラブタイム」のマッチで
火を点け

椎「うらやましがられるような人間やないよ」

栄子「地元じゃ未だにアイドルやん。運動も

勉強も出来て……」

椎「いまや留年の、水商売のお姉さんや」

栄子「水商売って？」

椎「キャバクラの延長かな。工工金になるけ
ど、接客向いてないんよ」

椎、店のマツチを栄子に渡す。

栄子がそのマツチを見つめていると

椎「工工加減、寝むなっでもうた。もう今日
はここで寝さして」

とタバコを灰皿に曖昧に押し付け、床に
寝転がる。

栄子「工工けど、風邪引くよ。とりあえずベ
ッド使い」

栄子は腰掛けたベッドから立ち上がり、
椎をベッドに誘導する。

栄子は部屋を出て、空き部屋からマット
レスを持って帰ってくる。

すると、椎は既に寝息を立てている。

栄子、くすぶって消えていなかったタバ
コを消そうとするがとどまり、それを口
にくわえ、肺まで吸わずに吹かしてみる。
煙が昇り充満するが、それが椎の顔にか
からぬよう、手で払う。

同・台所

栄子、換気扇の下で持って来た椎のタバ
コから新しい一本を取り出しくわえ、マ
ツチを擦る。

が、慣れない手つきで中々火が点かない。
やっとタバコに火をつけ吸いこむも、む
せる。

煙が換気扇に吸い込まれていく。

同・栄子の部屋（翌日・昼）

カーテンから漏れる日差しが既に強い。

椎、のそのそと起き出すも、そこに栄子はいない。

同・リビング

椎がリビングにやって来ると、テーブルの上に朝食が用意されているのを見つける。

椎、皿の下に置き手紙と鍵を見つけ、手に取る。

『おはよう。先に出掛けます。鍵はポストにでも。帰りにくかったら、今日もいていいよ。 栄子』

椎、立ったまま、冷めた朝食をほおぼる。

椎「……うまい」

片手で朝食をつまみながら、携帯を操作する。

着信履歴は、誰からもない。

椎「……」

椎のアパート・内（夕方）

椎、恐る恐る玄関の扉を開ける。

ゆっくりと中を覗くも、中には誰もいない。

鍵を閉め、中に入る。

駅からの道（夜）

仕事帰りの栄子、歩いている。

ふと気付き携帯を取り出すと橘夏樹（2
2）から着信が来ている。

夏樹の声「いま工か？ 明後日東京出るか
らさ、泊めてや」

栄子「……ウチに泊まるん？」

夏樹の声「ダメなん？ ホテル代もつたいな
いし、会いたいやん」

栄子「でも、仕事あるし……」

夏樹の声「そない忙しいんか？」

栄子「だって土日は……不動産屋やもん」

夏樹の声「……」

栄子「……ごめん」

しばらく携帯に耳を当てていると通話が切れた音が聞こえる。

栄子、ため息をつき、歩みを進める。

栄子のマンション・玄関・内へリビング帰宅した栄子、中に入るとリビングで椎が缶ビールを飲んでいる。

椎「おかえり。遅くまでお疲れ」

栄子、テーブルの側にキャリーバックが置かれているのに気付く。

椎「しばらくここにおさせてくれへん？ 迷

惑なっただらすぐ帰るから」

栄子「……もちろん。むしろ、嬉しいわ」

椎「悪いな。でも栄子、彼氏とか大丈夫？」

栄子「（笑い）おらへんから」

椎「そっか。じゃあ、甘えさせてもらうわ」

立ち上がり椎、冷蔵庫から缶の梅酒を取り出し、栄子に差し出す。

栄子「ありがとう」

栄子、それを受け取り乾杯する。

ラグアパ不動産・内（翌日・昼）

山本、若いカップルの客に物件を紹介している。

栄子、そこにお茶を持ってくる。

女客「（関西訛りで）新宿には出やすいみたいですけど……（彼氏に）土地勘がないから便利なんかどうか分からないね」

男客「せやねんなあ。お姉さん、ここ、どうです？」

栄子「（関西訛りで）私もこつちに来たばかりで……ごめんなさい」

女客「関西の方ですか？」

栄子「三重なんです」

女客「ウチらは大阪からなんですよ」

男客「（山本に）じゃあお兄さん、新宿がミナミやとしたら、ここは大阪でいうたらどこですかね？」

山本「僕は埼玉県出身でして……大阪で例えるのはちよつと……」

そのやり取りで和やかなムードになる。

栄子、会釈をして奥に下がる。

×

×

×

日も暮れ、店内から碇店長と五十嵐が仕事を終え出てくる。

残った栄子と山本、閉店作業をしている。

山本、チラチラと栄子の様子をうかがい

山本「今日栄子ちゃん、関西弁喋ってたね」

栄子「お客さんが向こうの方だと、つい」

山本「なんか栄子ちゃんのは上品で、やっぱりお嬢様だなあって思ったよ」

栄子「え？」

山本「店長に言われているからね。社長の友達のお娘さんだから、あまり厳しくするなんて」

栄子「……普通に扱ってもらって構いません」

山本「（焦り）いや、育ちがいいんだなって。

それだけだよ。良い意味でね」

栄子「……」

山本、しまったという顔から持ち直し

山本「もう遅いし、何か食べていかない？ 近

くにいいお店あるから」

栄子「ごめんなさい、家に友達がいるので、夕飯作らないといけないんですよ」

山本「そうなんだ……でも、一人暮らしじゃなかったっけ？」

栄子「ついこの間、たまたまルームシェアすることになった」

山本「……それ、男の人？」

栄子「違いますよ。女の子です」

山本「だよな。栄子ちゃん、奥手そうだもんね」

山本、栄子を見ないように作業を進める。

栄子のマンション・リビング（夜）

帰宅した栄子、ドアを開けるも、中は暗い。

電気を点けると、テーブルの上に置手紙があることに気付く。

『朝食ありがとう！ バイト行ってきます。終電逃したら始発で帰ります！ 椎』

それを読むや栄子、力が抜けたように両手にぶら下げた野菜や肉の袋を床に下ろす。

×

×

×

テーブルに二人分の夕食が出来ている。時計が深夜一時を告げるのを見届け、パジャマ姿の栄子はゆっくりと部屋へ向かう。

同・栄子の部屋（深夜）

栄子、置いたままのマットレスに横たわり、隣にある綺麗に整えた空っぽのベッドを見つめる。

同・リビング（翌朝）

パジャマ姿の栄子、昨日作った夕食を食べ終え皿を台所に持って来ると、椎が帰ってくる。

栄子「お疲れ様。こんな時間までご苦労様」
椎「疲れた」

と椎は栄子の部屋へ向かう。

椎「今日、暑くなりそうやで」

栄子「ね。そうや、洗濯しちゃうおう思うけど、

あつたら出して」

椎「ホンマに？　ありがとう」

と言うや椎、その場で脱ぎ出す。

栄子、皿洗いをしつつもその様子が視界に入ってくる。

ブラを外してパンツだけになった椎、脱いだ服をまとめて拾い上げる。

栄子「（椎を見ず）そこに置いといてくれればエエから」

椎「ありがと。ああ、二日酔いになるわ」

椎、服を床に置き直し、部屋に入る直前にパンツも脱ぎ、それを脱いだ服の山に投げ込む。

栄子、椎が扉を閉める隙間からまじまじと椎の裸体を見てしまう。

同・ベランダの栄子の部屋
栄子、洗濯物を丁寧に伸ばし、干し終わる。

部屋に戻ってくると布団が寝返りではだ
け、ベッドで裸で眠る椎の体が露わにな
っている。

それを見た栄子、布団を椎にかけ直し、
部屋を出る。

W大学・校門前（夕方）
試験前の大学の構内は多くの学生で溢れ
ている。

その学生の中から椎が門に向かって歩み
を進めていると、携帯に着信が。
画面に「徹」と表示されている。

椎、立ち止まりしばし考えるも電話には
出ず、駅へと向かう。

大学の最寄り駅
駅のホームに着いた椎。

恐る恐る携帯を見ると、徹から伝言メッセージが二件入っている。

イヤホンを付け再生すると

徹の声「椎……大丈夫か？ 凄く心配してる

んだぞ……頼むから……」

とそこで一件目のメッセージが切れる。

椎、すぐに次のメッセージを再生すると

徹の声「ちゃんとバイトには行ってね！ あ

とお金はちゃんと振り込んでね！ よろし

く」

聞き終わると、そこに電車がやって来る。

電車の扉が開き、乗客達が行き交う中、

椎はホームに立ち止まったまま。

椎が乗らなかつた電車が出発する。

椎、過ぎ去る電車を見届け、逆方向のホ

ームに進みながら電話をかける。

椎「お疲れ様です。今日人足りないって言っ

てましたよね？ はい、今から行きます」

栄子のマンション・栄子の部屋（夜）

仕事から戻った栄子、仕事着のまま洗濯物を取り込み、椎の洗濯物から畳み始める。

畳みながらベッドを見ると、布団が大胆にはだけ、そのままの形を維持している。栄子は笑みを浮かべ、おもむろにベッドの中へ。

布団を自分に被せそのまま休んでいると、床が揺れる音が。

栄子はその揺れる携帯を見ると、夏樹からの着信の表示。

夏樹の声「今、家の前なんやけど」

栄子「……ウソやる？」

栄子、窓を開け見下ろすと、夏樹がいる。

同・リビング

栄子、夏樹にコーヒーを出す。

栄子「仕事や言うたやん」

夏樹「週末しか来れへんもん。泊めてや」

栄子「いま友達と一緒に住んどるから困るんよ」

夏樹「は？」

夏樹、奥の空き部屋を一瞥し

夏樹「……男か？」

栄子「女の子」

夏樹「焦ったわ」

栄子「……」

夏樹「じゃあ別にエエやん」

夏樹、栄子の横に来て肩を抱き寄せる。

夏樹「会いたかったんやもん、しゃあないやろ？」

とキスをするも、栄子はノってこない。

夏樹「……やっぱ男なんやろ？」

栄子「せやから違うて」

夏樹「じゃあベッド行こ」

夏樹、栄子の部屋に歩き出しドアを開ける。

開いたドアの隙間からベッドが見える。

栄子「……ベッドはアカン。友達がそこで寝

とるんよ」

夏樹「エエやん、ちよつとやし」

と構わず中に入るうとする。

栄子「……私だってさびしかったんよ」

ベッドに入る寸前のその言葉で夏樹は振り返り、リビングへ戻ってくる。

夏樹「かわいいこと言うやん」

栄子、夏樹に身体を預け、夏樹はそれを受け止める。

栄子、顔を寄せ夏樹の耳元で

栄子「ここでも、エエやろ？」

夏樹、一瞬驚くも、身体は自然と栄子を求める。

二人、その場でなだれ込む。

x

x

x

行為の終わった二人、床に仰向けになりリビングで天井を見上げている。

夏樹、自分の胸に頭を乗せた栄子の髪を触りながら

夏樹「寒ない？」

栄子「……大丈夫」

夏樹「もうベッド行こうや」

栄子「友達帰ってくるから……」

夏樹「（笑い）このままやったら、それこそ大変やる」

栄子「……本当に泊まるん？」

夏樹「なんでダメなん？」

ゆっくりと起き出した栄子、自分の部屋からマットレスを空き部屋に持って行き、夏樹を手招きする。

同・空き部屋

部屋にやって来た夏樹、マットレスに寝転がる。

栄子、ドア付近に立ったまま

栄子「私が出勤する時間に夏樹くんも出てつてや」

夏樹「そない会わせたくないんか？」

栄子「女の子一人おいて、隣で男、寝かせとく訳にいかんやる？」

栄子、部屋の電気を消す。

同・リビングへ栄子の部屋（翌朝）

栄子が三人分の朝食を作っていると、椎が帰って来る。

栄子「（小さめの声で）おかえり」

栄子、ちらりと横目で空き部屋の戸が閉まっているのを確認する。

椎「疲れたわー」

椎、栄子の部屋のベッドに直行すると、脇に置かれた洗濯物を見つける。

椎「あ！　ありがとな、これ」

栄子「うん」

椎「メシも洗濯も……少しでもお金入れんと

あかなこれは」

栄子「エエよ、そんなの」

椎「……栄子のヒモになったみたいや」

栄子「（笑い）何やそれ」

椎「（ベッドに突っ伏し）都合のエエ女になつたらアカンよ」

椎、部屋の扉を閉める。

同・空き部屋

出勤姿の栄子、夏樹を起こしに来る。

栄子「（小声で）ちょっと、エエ加減起きて」

夏樹「（寝ぼけ声で）あと十分」

栄子「（小声で）もう友達帰って来とるんよ」

栄子に揺さぶられるも夏樹はテコでも起きない。

栄子、諦め、枕の脇に鍵を置く。

栄子「絶対会わんでや。鍵、ポスト入れとい
てな」

言い残し栄子、部屋を出て行く。

ラグアパ不動産・店内（昼）

栄子、そわそわと時間を気にしている。

山本がそこに近付いてくる。

山本「お腹、空いた？」

栄子「……そうですね」

山本「じゃあ先に食べて来ていいよ」

山本、笑顔で去っていく。

栄子、再度店内の壁掛け時計を見つめる。

同・リビング

帰り支度の夏樹、部屋からリビングに出て来るとテーブルの上にある朝食を見つめる。

荷物を置いて食べ始めると

椎の声「え、なに？ 今日休みなん？」

薄着のまま椎がリビングにやってくる。

夏樹「やべ、あの、俺、栄子の彼氏の……あれ？」

寝ぼけ眼の椎、手に持ったメガネをかけて、夏樹の顔を見る。

椎「……え、夏樹か？」

夏樹「やつぱり椎か？」

椎「……なんで？」

夏樹「いや、朝食を……だからあいつ、会わせたくなかったんか」

x

x

x

テーブルには酒の空き缶が数本並んでい
る。

赤ら顔の椎と夏樹、横並びで椅子に座り、
新しい酒を開ける。

椎「別にウチらが付き合ってたとか、気遣わ
んでもええのに」

夏樹「なあ」

椎「なあ、やないわ。あんたが氣い遣わな」

夏樹「お前と住んどるなんて知らんかったん
や。お前ら、別に仲良うなかつたのになん
で一緒に住んどんの？」

椎「たまたまこっちで会って、色々あつて転
がり込んだ」

夏樹「……お前、そんな奴やつたっけ？」

椎「昔のイメージで喋らんという」
椎、タバコに火を点ける。

夏樹「しかしあの椎が留年のイチャキャバ嬢
ねえ。タバコも吸うとるし……変わったな」

椎「別れて良かった、思うとるやる？」

夏樹「フツたんはお前やる……相変わらず綺

麗やし。それだけは変わってへんわ」

夏樹、椎に肩を寄せ

夏樹「なんで俺、フラれたんやっけ？」

椎「……なんとなく、やない？」

酔いの回った椎、目の前の夏樹の唇に指でそつと触れる。

夏樹、軽い笑みを浮かべ

夏樹「……それはなんで？」

椎「……なんとなくや」

ついつい唇を重ねる二人、なだれ込む。

ラグアパ不動産・店外（夜）

山本が店の鍵を閉めている。

栄子、それを店の外で待つ間に携帯を取り出し、夏樹から届いていたメールを開く。

『昨日はありがと。いま新幹線乗ったから。働き過ぎたらアカンよ。またな』

閉め終わった山本、栄子に近づき

山本「彼氏？」

栄子「（携帯をしまい）違いますよ」

二人は並んで駅へ向かい歩く。

山本「栄子ちゃんって、お固いの？ 全然夜

遊びもしたことなさそうだけど」

栄子「よくそう言われるんですけど……」

山本「明日、休みだよな？ どう、（笑い）

夜遊びしてみる？」

栄子「……山本さん、キャバクラって、女で

も行けるんですかね？」

山本「……どういうこと？」

栄子、歩みを止め、山本を見つめる。

「ラブタイム」・店内

着席した栄子と山本。

他の客と女との密着を見て、栄子は落ち着かない。

同様に山本もそわそわしている。

椎ともう一人の女が席にやって来る。

椎「（山本に）ご指名ありがとうございます。

ユカです」

山本「いや、指名したのはこの子なんだ」

椎「（栄子に気付き）ちょっと！ どうしたの？」

栄子「マツチにお店の名前、書いてあったから……遊びに来た」

椎、栄子の横へ座り、もう一人の女は山本の隣へ座る。

栄子「（周りを見て）なんか、すごいところな」

椎「あなたには一生縁のない場所やったるうね」

栄子「……ごめん。迷惑やった？」

椎「変な親父よりよっぽどエエよ。あ、こちらの方じゃないよ」

栄子と椎、山本を見ると、もう一人の女が山本の手を肩に掛けさせ密着しており、山本は酷くドギマギしている。

椎「……あなたも手広くやっとなるんやなあ」

栄子「違うて。会社の先輩。一人だとアレやから、お願いしてついてきてもらったんよ」

椎「デートやったんやないの？」

栄子「（笑い）違うて」

椎「でも彼は多分、そのつもりやったやんな？」

栄子「うーん……」

椎「タバコ吸ってもエエ？」

栄子「あ、じゃあ私もエエ？」

椎「は？ あんた吸うてへんやろ？」

栄子、椎と同じキャスターを取り出す。

栄子「この間椎が寝た後勝手に一本もらって

それから少しだけ。ごめんね」

椎、栄子のタバコにマッチで火を点ける。

椎も自分のタバコに火を点け

椎「ちゃんと気にせんで、言うてな。ビツク

りするやんか」

栄子「ごめん。でも、もう自分の買ったから」

椎「タバコやない」

栄子「あ、やっぱりお店来たら迷惑やんな。

ごめんな」

椎「……夏樹や」

栄子「……会うてまったの？」

椎「起きたらリビングでメシ食うとんのやも
ん」

栄子「……ごめん」

椎「あんた、謝り過ぎやで」

栄子「ごめん……」

椎「別に昔の男やからとかそういうことやな
くて、あたしに氣い遣わんでエエいうこと」

栄子「ごめん……」

椎「また……」

栄子と椎、お互いに一服ついて

椎「あいつが地銀入ったなんてたいしたもん
や。せやけど言うてた。栄子は親の決めた
男と結婚せなあかんから、虚しいて」

栄子「……田舎もんやからな、あたしも、家
族も」

栄子、タバコを灰皿にもみ消し、椎は灰
皿に手を伸ばす。

椎「店の規則でな、一本ごとに灰皿新しくす
るんよ」

栄子、その椎の指を見ている。

椎「あんたは、一つの灰皿の中で生きてかんとアカンのやな」

交換する灰皿の上に新しい灰皿を置き、
吸い殻が密封される。

栄子「こんな感じなんやろうかねえ」

椎「え？」

栄子「蓋されて、もうそのまま、いう感じ」
灰皿の中、消しの甘かったタバコの火が
くすぶって、消えていく。

栄子のマンション・リビング（数日後・

午後）

テーブルに朝食が用意されている。

昼もとうに過ぎた頃、部屋から寝起きの
椎が出てくる。

朝食を食べ始めると、徹から着信。

しばし迷い、渋々通話のボタンを押すが、
自分から言葉を発せない。

徹の声「……出たんなら、何か言えよ」

椎「かけてきたのはそつちでしょ」

徹の声「どこにいるんだよ？」

椎「…なんで？」

徹の声「なんで？」

椎「そう。なんで」

徹の声「…俺のこと好きなんだろ？」

椎「…」

×

×

×

日も沈みかけたりビング。

椎の正面、テーブルを挟んで向かい合っ

て徹が座っている。

徹「お前がいないとダメなんだよ」

椎「…」

徹「借金もあるしな」

椎「…あんたの財布じゃないんだよ」

徹「じゃあ何？」

椎「何って、モノじゃない」

徹「女、だもんな」

椎、黙っている。

徹「好きだろ？俺のこと」

椎、身体ごと視線を逸らす。

椎「借金払ったら、別れてくれる？」

徹「（笑い）本当に別れたいの？」

椎「……払う」

徹「……じゃあ三日後、俺んちに持ってきて。

百万でいいよ」

椎「俺んちってどこよ。あたしの家じゃない」

徹「じゃあよろしく」

徹、立ち上がり去ろうとするが、徹の袖を椎が掴む。

徹「あらら」

椎も立ち上がり、徹にキス。

椎「（睨みながら）これでやっとあんたと別れられる」

徹、椎をその場に押し倒す。

椎もそれを受け入れ、猛然と絡み合う。

徹「女は大変だよな。心と体と、心と心に引き裂かれてさ」

椎、悔しい顔であるが、声が漏れ出てしまふ。

徹、椎の服を剥ぎ、右手で椎の左胸を鷲掴むと

徹「あれ、こっちの方が大きくなってねえ？」
ブラを剥ぐと、椎の左胸は右胸よりも若干大きいのが分かる。

椎「誰のせいなんよ……」

徹、椎の唇を塞ぎ、激しく求める。

同・玄関・内々リビングく栄子の部屋（夜）
帰宅した栄子、玄関に男の靴があるのに気付く。

再び家を出ようと一瞬戸惑うが、やがて足は中へ動く。

少し開いたままの部屋のドアから、椎が上になって激しく動いているのが見える。
やがて果て、徹はすぐにタバコに火を点ける。

徹「で、友達帰ってきたみたいだけど」

徹が立ち上がり、部屋のドアを開けるとその外に栄子が立っている。

徹「（栄子に）はい、こんばんは」

栄子、何も返せず、ただ俯いている。

椎「（栄子を見て）……早いね」

徹「早い？ 俺がか？（と笑う）」

栄子「ごめんなさい……」

椎、無造作に脱がされた服を着始める。

椎「……ちよつと荷物取りに行くわ。あんたも早く着替えて」

徹「へいへい」

と素直に着替え始め、椎と共に部屋を出ていく。

栄子、二人がいたベッドを見ている。

椎のアパート・内

椎、手当たり次第に荷物を段ボールに詰めていく。

徹「（手を差し出し）ほら」

椎、バッグから消費者金融の名がある封筒を取り出し、徹に渡す。

椎「部屋空ける日が決まったら、連絡するか

ら
」

徹、返事をせず金を数える。

椎「タクシー呼んどいてよ」

徹、それも無視して金を数え終わると、
ベッドに寝転び大あくびをする。

椎「ほんと、クズだね」

徹、ニヤニヤと笑みを浮かべ

徹「友達のベッドでイキまくるお前に言われ
たかねえよ」

椎、それには返答せず、電話でタクシー
を呼ぶ。

同・外の敷地へタクシー車内

タクシーのトランクに荷物を詰め終えた
椎。

徹はあくびをしつつそれを見ている。

椎、無言で車内へ入り、車は動き出す。

徹「バイバイ」

と手を振る徹を椎はバックミラーで見る。
運転手「お客さん、どちらまで？」

椎「……どうしようかな」

運転手「え？」

椎「しばらく高速、走ってもらえませんか」

× × ×

首都高を走るタクシー。

イヤホンを付け音楽を聴いている椎、闇
夜に浮かぶ東京のビルの光を見つめてい
る。

運転手「お客さん、そろそろ、ですか？」

椎「（イヤホンを外し）はい？」

運転手「料金結構、いっちゃってますし、そ
ろそろ戻りますか？」

椎「儲かっていいじゃないですか」

運転手「はあ……」

椎「……でももう戻ろうかな」

運転手「……分かりました」

椎、再びイヤホンを付け、流れる景色を
見ている。

栄子のマンション・空き部屋（深夜）

椎、段ボールを入れ込んだ空き部屋にマ
ットレスを運び込んでくる。

パジャマ姿の栄子はただそれを眺めてい
る。

椎「……今日からこの部屋、使わせて」

栄子「ええよ」

椎「……他に行くところ、ないから」

栄子「……ええよ」

椎、静かに電気を消す。

ラグアパ不動産・内（翌日・午後）

店にカツプルの客が来ている。

五十嵐「伊藤さん、お茶、お願いします」

栄子「あ、すみません」

五十嵐、栄子の方に近付いてきて

五十嵐「（小声で）ダメよ。今日ずーっとば

ーっとしてるじゃない」

栄子「申し訳ありません」

山本、その様子を眺めている。

栄子がお茶を出し終え、五十嵐がカップの対応を始めると、山本が近付いて来る。

山本「大丈夫？ 体調悪ければ無理しないでいいからね」

栄子「ありがとうございます」

栄子、奥に戻る。

山本、その背中を見ている。

栄子のマンション・エントランス前（夜）

仕事帰りの栄子、縁に腰掛けタバコを吸っている徹に気付く。

徹は地面に置いた段ボールを指差し

徹「あとは捨てていいって言われたんだけどさ、邪魔だから」

栄子、何も言わず、エントランスの扉を開き、徹もそれについていく。

同・リビング

お茶を出した栄子、テーブルをはさみ、

徹と向かい合って椅子に座る。

徹「あいつの友達って感じ、しないよね」

栄子、口をギョツと結んでいる。

徹「あいつとは人種が違う。生娘のお嬢さん、

家は裕福。当たり？」

栄子、黙っている。

徹「高校の時、あいつってどんな奴だったの？」

徹、マルボ口を取り出し火を点ける。

栄子「……みんなの憧れでした」

徹「（笑い）でした」

栄子「今も地元の子には、アイドルですよ」

徹「（笑い）アイドルって。あ、俺がああしたなんて思わないでね。会った時からもう

あんな感じだったんだから」

栄子「（強い口調で）あんな感じって、どんな感じですか？」

徹、栄子のその真剣な表情を見て

徹「ふん」

栄子、キヤスターを開けるが、空。

徹、自分のマルボロを一本差し出す。

徹「カマトト？ それとも、世間知らず？」

栄子がそれを受け取ると徹がライターを点ける。

栄子、徹の火を受けず、自分でマッチを擦ろうとする。

徹、その栄子の手を掴んで

徹「この間、なんで見てたの？」

徹、自分のくわえたタバコを栄子の唇に持っていく。

それを吸った栄子、キツイマルボロに少しむせる。

栄子「……興味があったから」

徹「俺に？ 地元のアイドルのセックスに？」

栄子、少しだけ頷く。

徹「どっちなんだよ」

徹が顔を近付けると栄子から唇を重ねる。

同・栄子の部屋

下着だけを身につけた栄子、部屋の窓か

ら徹が去って行くのを見届けると、本棚から高校の卒業アルバムを取り出す。眼鏡をかけた地味な栄子と、清楚な椎が写真に並んでいる。

栄子「（椎を見て）全然変わってないやん」
置いてあつた手鏡を取り、自分の顔を見る。

自分の写真と、鏡の自分を見比べる。

栄子「変わってないかな……」

「ラブタイム」・店内（数日後・夜）

椎、人もまばらな店の奥でタバコを吸っている。

そこに早乙女が近付いてくる。

早乙女「今月は随分出てくれてるわね」

椎「マズいですか？」

早乙女「真面目になつたなと思っただけ」

椎「娼婦を自覚したんですよ」

嫌な顔をする早乙女の横からボーイがやって来る。

ボーイ「ユカちゃん、ご指名」

客席に向かうと、夏樹が座っている。

夏樹「（笑い）ユカってどういうことやねん」

椎「……何しに来たの？」

夏樹「何しにつて、東京来たついでにな」

椎「あの子、お店教えたん？」

椎、仕方ないといった表情で席に座る。

夏樹「なあ、俺とやり直さへん？」

椎「はあ？」

夏樹「もう一回、付き合ってくれへんかな？」

椎「お客様との個人的なお付き合いは禁止や」

夏樹「本気やで、俺」

椎、無視して水割りを作る。

夏樹「栄子にフラれたんよ」

椎、一瞬水割りを作る手が止まるが、何

事も無かったかのように作業を再開し

椎「ヤツちゃったの、バレたん？」

夏樹「それはないな。好きな人出来たからで」

椎「そんなら別にエエやん。仕方ないやろ？」

どうせ栄子とは結婚出来へんのやし」

夏樹、無言で下を向く。

椎「……ごめん」

と椎は水割りを差し出し、夏樹はそれを一口、口に含む。

椎「何年付き合ってたの？」

夏樹「……四年」

椎「そりゃ、キツイわな」

夏樹「お前にフラれたんが、卒業式の前の日やる。で、卒業式の日、向こうからや」

飲み干した夏樹、目で促す。

椎は黙って水割りを作り始める。

夏樹「卒業式の後に打ち上げあったやる？」

その二次会前に、いきなり『椎ちゃんと別れたん？』言うてきてな」

椎「もしかしてあんた、栄子の初めての男なん？」

夏樹「違うよ。あいつ、高校ン時は友部とも柿谷とも付き合ってるらしい」

椎「嘘やる？ あの子、そんな子やないやろ？」

夏樹「意外に多いんよ。同じ中学やったから分かるやろうけど、中学ン時は白瀬と、あとは…… 幸助か」

それを聞いた椎、急に怪訝な顔になる。

椎「それ、ホンマに？」

夏樹「俺もビックリした。処女やなかったんやな、言うたら、色々教えてくれたわ」

椎「……それ、順番は？」

夏樹「順番？ 最初が幸助やから、白瀬、友部、柿谷、で、俺か」

椎、水割りを作る手が完全に止まる。

夏樹「……なんや？」

椎「あんた、あたしの男遍歴知つとるやろ？」

夏樹「（少し考え）ああ！ お前の元カレばっかりや！」

椎「それがホンマなら、順番も一緒や」

夏樹「なんや、それ……」

椎「おかしいやろ……」

椎、真剣に黙りこむ。

夏樹「……で、どうなん？」

と椎の肩に手を回す。

夏樹「俺、まだお前のこと、好きや」

椎「……やめや」

夏樹「分かったんや。やっぱりお前が一番や」

椎「いまそんな気分やない」

椎、夏樹を突き放すと

夏樹「（急変し）コラ！俺は客やぞ！娼

婦は娼婦らしく振る舞えや！」

椎「娼婦やない！」

夏樹「娼婦やる！お前も落ちたもんやな！」

椎、夏樹に作りかけの水割りをぶっかける。

椎「その娼婦に復縁迫るあんたはなんなん！」

夏樹「死ね！」

椎「お前が死ね！」

椎、キャミソール姿のまま店を飛び出ようとする。

騒ぎを聞きつけ出てきた早乙女がドアを塞ぐ。

早乙女「いいの？クビよ？」

椎、無言で早乙女を押しつけ出て行く。

椎のアパート・外（内）深夜

椎、ドアの前で迷うも、やがて部屋の中へ。

ごみごみとして汚れた部屋の中、ベッドに仰向けで眼を瞑ったままイヤホンを付けた徹がいる。

それを見て椎、無言でベッドの傍の床に座る。

テーブルの上には開いたノートPC。

その画面には数行の小説のような文章が映し出されたままだ。

『シイにはただ冷たく当たり続けた。時代遅れの私小説家気取りの居心地の悪さと心地良さ……』

椎、それを読んでいると

徹「何しに来たんだよ」

と徹、イヤホンを外す。

椎、ベッドに腰掛け

椎「店、クビになった」

徹は起き上がり、PCを閉じる。

徹「で？」

椎「……別に」

徹は立ち上がり、冷蔵庫から缶ビールを
持ってくる。

徹「まあ、あれだ。泊ってけよ
と差し出す。

椎、無言でそれを受け取り、飲む。

徹「あら。『ここは私の家だ！』って言われ
ると思ったのにな」

椎「……」

徹、椎の髪に優しく触れる。

徹「違う仕事、紹介出来るぞ」

椎「……」

徹「もっと高い金のところで、イイな？」

椎、静かに頷く。

徹、椎の酒を奪ってテーブルに置き、椎
を押し倒す。

椎「（冷めた声で）そんな気分じゃないの」

徹「男の所に来てそれは筋が通らないだろ」

椎「今日はイヤ」

徹「じゃあ一回千円でどうだ？」

椎「ふざけんな。娼婦じゃねえ」

徹「さつき領いただろ。もつと高い金のところって、本当に娼婦だぞ」

言いつつ徹は手を止めず、椎の服を脱がせにかかる。

椎は抵抗せず、冷めた表情でされるがまま。

徹、それを見て手を止め

徹「お前、一度も俺の前で泣いたことないよな。こつちが悲しくなるよ」

椎「……あんだ、自分が付き合ってた女ばかりと付き合う友達とかいたら、どう思う？」

徹「……穴は穴だからなあ」

椎、黙っている。

徹「（得心した顔で）なるほどね」

椎「……なんでこんな男好きになったんだろ」

椎、自分から徹を求め始める。

お互いに高まりながら

椎「穴が穴なら、棒は棒なんかね？」

徹「聞いてみれば？ その友達に」

椎、くやしい顔から徐々に恍惚していく。

駅・改札前（翌朝）

出勤姿の栄子がやって来ると、ちょうど
椎が改札から出てくるのが見え

栄子「椎！」

と声をかける。

椎、その場に立ち止まり、栄子がそこま
でやって来る。

栄子「（関西訛りで）お疲れさま。ごはんあ
るから食べてな」

椎「……（標準語で）もう作らないでいいよ」

栄子「（関西訛りで）どういうこと？」

椎「（標準語で）洗濯も。ていうか、もうす
ぐ新しい部屋見つけて、すぐ出てくから」

栄子「（標準語になり）え、なんで？ ウチ
来た、ばっかじゃん」

椎「……（標準語で）迷惑だから」

栄子「（標準語で）だから、全然迷惑じゃないって」

椎「（関西訛りになり）なんであたしが標準語喋ったらあんたもそうなるん！　なんやもう、よう分からん……」

栄子「（関西訛りに戻り）椎、どないしたん？」

椎「（標準語で）迷惑なんだよ！　さびしいなら新しい男と住めよ！」

椎、去っていく。

ラグアパ不動産からの帰り道（夜）

仕事を終えた栄子と山本、駅へ向かっている。

栄子は無言で、表情がない。

山本「（それを見て）何かあったの？」

栄子「いえ、大丈夫です」

山本「今日もそうだったけど……最近の仕事ぶりを見る限り、大丈夫そうには見えないんだけど」

栄子「申し訳ないです。ちゃんと仕事はします」

山本「仕事はどうでもいいんだけど……」

栄子、何も返さず、うつむきながら歩いている。

山本「どう、ちょっと呑んでいかない？」

栄子「断つてばかりだと申し訳ないな……」

山本「ほんと、可愛いね、栄子ちゃん」

栄子「……すいません、やっぱり、帰ります」

山本「ほら、先輩が相談に乗るから」

栄子、苦笑いだけで答える。

山本「凄く気になるんだ、栄子ちゃんのこと」

栄子「……明日からはしっかり仕事しますの
で」

山本「だから仕事じゃないんだって」

山本、恐る恐る栄子の手を握る。

山本「栄子ちゃんのこと、気になるんだよ」

栄子「……ありがとうございます。今日は、

失礼します」

と一礼し、小走りで一人先へ進む。

山本は立ち止まり、栄子の背を見つめる。

風俗街

山本、ウロウロと徘徊しつつ、店に入る
うかどうか迷っている。

そこにフラフラと徹が現れ、山本と眼が
合う。

徹の後ろから店から出て来た男が徹に近
付き、声をかける。

徹「（振り向き）お、どうでした？」

男「最高。イイ娘連れてきたね」

と徹の肩をポンと叩き、笑顔で去ってい
く。

徹、まだウロウロしている山本を見て

徹「お兄さん、女の子？」

ピンサロ「チュッパチャップス」・受付
山本を連れて入って来た徹、受付にいる
男店長に

徹「あいつまだ居るでしょ？ 指名入ったか

らそのままにしといて」

山本「ちよつと！ 指名なんかしてないでしょ！？」

徹「大丈夫だって。今日初日のいい女。チャンスだよ」

内線で確認を取った男店長、徹に

男店長「ユカさん、OKです」

徹「さあ行つた行つた！」

山本、言われるまま中へ入っていく。

徹「評判いいだろ？」

男店長「テクもあるつて上々ですよ」

徹「俺が仕込んでんだ、当たり前だろ？」

男店長「じゃあ徹くん並の遅漏も大丈夫だ」

徹「バーカ、俺は超早漏の数勝負だよ」

笑いながら徹、右の掌を差し出す。

男店長「へ？ 紹介料は渡したでしょ？」

徹「客引つ張つてきたんだから、客引き料」

同・店内

山本、中に入ると椎が既に座っている。

椎「こんばんは。ユカです」

山本「あれ！？ あの、栄子ちゃんの……」

椎「（思い出し）ああ、会社の方」

山本「すいません！ 帰ります！」

椎、出て行こうとする山本を止める。

椎「指名しといてどうしたんですか？」

山本「変な男に無理やり決められて……ごめんなさい！」

椎「……なんで謝んのよ、どいつもこいつも」

椎、深くため息をついてから

椎「いいから、座って下さい」

山本、抵抗出来ず座ってしまう。

椎「これは仕事だから、気にしないで下さい」

椎、山本のベルトを外し、パンツも脱がす。

山本「でも明日どんな顔で栄子ちゃんに会えばいいのか、あ！」

椎、山本のモノを触っている。

椎「あたしがあの子の知り合いじゃなければ笑顔で出勤出来たの？」

山本「いや、その……」

椎「ズルイなあ」

椎、山本のモノを口に含む。

山本、息が荒くなつていき、すぐに椎の口の中で果ててしまう。

山本「……ごめんなさい」

椎、ティッシュに精液を吐き出し

椎「直ぐに謝るの、やめた方がいいですよ」

山本「ごめんなさい、あ、すみません……あれ？」

椎「（笑い）お似合いかもしれないけど、あなたは栄子とは付き合えないと思うよ」

山本「やつぱり嫌われてるんですか！？」

椎「そうじゃなくて……」

山本「俺、女の子のこと、全然分かんないから……」

椎「女でも女のことなんか分かんないよ。特にあの子はね……」

山本「そうなんですか？」

椎「……男はなんて言うか、分かり易いでし

よ？」

山本「はあ」

椎「男は、具体的な言葉で喋るから分かりやすいの。女は感覚で喋るけど、栄子は分かり易い言葉しか言わないから、逆に分かりないんだよ」

山本「……すみません、それ、全然分かりません」

椎「あたしもダメな男に騙されてるから、男も分からないのかな」

山本「僕、そんなにダメな男でしょうか？」

椎「……あなたのことじゃないですよ。もっと自信持つて。ほら、まだ元気なんだし」

椎、山本の衰えないモノを擦る。

ふと手を止め店内に人がいないのを見て、椎は服を脱ぎ始める。

椎「お店の人には内緒ですよ」

山本、椎に近づきおっかなびっくり体に触っていくが、下の方まで近づき戸惑う。

椎「ほら（と促す）」

すると、玄関に男の靴がある。

椎「……」

静かに中に歩みを進める。

同・栄子の部屋

椎がドアを開けると、栄子と徹がまぐわっている。

栄子「（椎に気付き）！」

椎「……何してんの？」

徹、椎によく気付いたかのように、

動きを止める。

徹「あれ？ 早いな。おかえり」

椎「どうということなんだよ！」

徹「知ってたんだろ？ お前言ったろ、穴が

穴なら……」

椎「帰れよ！」

徹「もうちよつとでイキそうだから、少しだ

け……」

椎「（遮り）帰れ！」

徹、やれやれと服を持ち部屋を去り、ド

アを閉める。

栄子「……ごめん」

椎、タバコに火を点ける。

椎「この間夏樹が店に来たんや。好きな人出来たからてあんにフラれた言うてたけど、あいつなんか？」

栄子「……ごめんなさい」

椎「謝んな言うてるやる！」

椎、バッグを栄子に投げつける。

椎「誰と付き合ってもかまへん。でもな、徹はやめとき」

栄子、「ごめんと言おうとするが飲み込み、黙る。

椎「あんだ、金取られたか？」

栄子「……少し、貸した」

椎「あいつはそういう奴や。やめ」

栄子、何も答えられず、自然とタバコに火を点ける。

椎「（それを見て）タバコもあたしが来てから吸い……」

椎、ハツとして

椎「あんた、なんなん？」

栄子「え？」

椎「あたしの男とばかり付き合うとる、夏樹がそう言うてた。真似ばっかしてなんなん？」

栄子「……分からん」

椎「分からん、ちやうやろ」

栄子、それでも答えられない。

諦めた椎、部屋を出てリビングへ向かう。

同・リビング

椎がやって来ると、玄関先に座り込んでいる徹を見つける。

徹は振り返り、椎に笑みを浮かべる。

椎、微笑み返し、すぐ冷たい眼を徹に向ける。

それを見て徹、何も言わず玄関から出て行く。

椎、自分の（空き）部屋へ入る。

入れ違いに服を着た栄子がリビングへや
つて来て、椎の（空き）部屋の前へ。

栄子「椎、ごめん！ 私にも分からへんの！」
しかし返事はない。

栄子「私が悪いのは分かってる。でも、なん
でか、そうなるんよ」

部屋の電気が消されるのがドアの隙間か
ら分かる。

栄子「ごめんな……」

椎は何も答えない。

栄子「椎は今も、私にはアイドルなんよ……」

栄子、椎からの返答の無いまま、しばし
ドアの前で立ち尽くす。

×

×

×

目覚ましのアラームが栄子の携帯から鳴
り響く。

栄子、朝日が差して来たリビングのテ
ブルに突っ伏したままの体を起こす。

足元がおぼつかず、くしゃみをする。

栄子、フラフラと部屋へ戻る。

ピンサロ「チュツパチャップス」・店内

(翌日・午後)

椎、客を待っていると徹がやって来る。

椎「……これから客、来るんだけど」

徹「俺が客」

椎「は？」

徹「この間客引つ張ってきたのにマージンくれねえからさ、代わりに現物支給だって。」

ナメてるよなあ」

椎「ナメてんのはあんだだよ」

徹「これから舐めてくれるのは、お前だけだな」

椎、笑みを浮かべる徹を睨む。

徹「なんだよ、客選べる立場じゃねえだろ」

徹、椎の横に座り、体を手慣れた様子で触っていく。

椎、早く切り上げるため徹のズボンを脱がしにかかる。

徹「おいおい、もっとサービスしろよ」

椎は構わず、すぐにくわえる。

徹、椎の上着の隙間から脇に手を入れる。

椎はビクンとなる。

徹「仕事なのに感じちゃ、マズいよなあ」

椎、徹を睨みつける。

徹「いいよ、その目」

それを聞くや椎、視線を逸らし、くわえながら頭を上下に激しく動かす。

徹「……にしても、なんでお前の男ばつかとやるんだろうな」

椎、黙って機械的に顎を動かし続ける。

徹「昔誰かのエッセイで読んだな。お前らと似たような、友達の元カレばつかと付き合う女の話」

徹、何も言わず突然果て、椎は嫌な顔でおしぼりに精液を吐き出す。

徹、ズボンを履き、タバコに火を点ける。

椎「それで？」

徹「あ？」

椎「その続き」

徹「……ずっとその女のが好きだったん

だつてよ」

それを聞くも、椎の表情は変わらない。

徹「あいつの場合だと、自分でも気付いていないのかもな。頭ではごまかしているのか、何なのか」

椎、黙考する。

徹「物分かりの良い、ああいう気が利く女は、自分の運命を受け入れてんだろな」

椎「……分かったようなこと言うね」

徹「親の決めた男と結婚して、ガキ産んで、それが女の幸せですって顔して生きていく。無条件でそういうの、受け入れてんだよ」

椎「いつの時代の話だよ」

徹「田舎のイトコの家なんて未だにそんなもんだろ。そうやって何事も自分の欲望を抑えて生きて来た。それで屈折して、お前のことを好きになった」

椎「……やめて」

徹「どうしようもないグズってことだな。自分で何かを決断したり、切り開いたりする

ことが出来ない、どうしようもない女だよ」

椎「最低だな、あんた」

徹「お前だって気持ち悪いと思ってんだろ？」

椎「女の心を知ったふりして、勝ったつもり？」

徹「勝ち負けじゃねえよ。俺に都合がイイだけ」

徹、タバコを消し、部屋を出ようとする。

椎、その背中に向かって

椎「そんなに人の心が分かるんだったら、さ

つさと小説書けよ」

徹、笑みを浮かべ振り返り

徹「お、言い返したな」

椎「小説書いてるって言うてるけど、あんたが真剣に書いてるとこなんか、一度も見たことない」

徹「その代り、おつむの弱い女をいっぱい釣ってる」

椎「口だけ男」

徹「お前は口だけ女、だな」

徹、笑いながらフェラの仕草をして部屋を出て行く。

同・受付／店外

先とは打って変わって鬼のような形相の徹が店内から受付に出てくる。

男店長「どうしたの？」

徹「うるせえ！」

徹、どなり散らし外へ。

徹「書けねえもんは、書けねえんだよ……」

徹、街に去っていく。

栄子のマンション・リビング（夕方過ぎ）
帰って来た椎、リビングに入るとテーブルの上に夕食が用意されている。

部屋の奥から

栄子の声「おかえり」

とか細い声が聞こえる。

驚き椎、栄子の部屋のドアをそつと開ける。

同・栄子の部屋

椎が中に入ると、栄子が冷えピタをして横になっている。

椎「……早退したんか？」

栄子「大丈夫言うたんやけど、帰れ言われて」
椎「なんでそんな状態でメシなんか作るん？」

栄子「大丈夫なんよ。でも、作ってる途中でフラフラしてきたから、寝てる」

栄子は柔らかく笑い、体温計を取り出す。

栄子「あかん、9度や。でもマスクして作っ

たから心配せんで食べて」

椎「……」

栄子「ちよつと寝るわ」

言い終わるや椎に背を向ける。

椎、無言で部屋を去る。

同・空き部屋

中に入ると椎、崩れるように横になる。
ふと携帯を手に取り、電話帳を眺め始める。

「幸助」「白瀬」「友部」「柿谷」「夏樹」など、付き合つて来た男たちの連絡先がまだ残っている。

椎、それを削除しようとするが、最後に「本当に削除しますか？」という画面が現れると、キャンセルを選択する。

椎、携帯電話を投げ飛ばし、突つ伏す。

同・リビング（翌朝）

椎、部屋からリビングに出て来る。

テーブルには朝食が用意されて、いない。

栄子の部屋から話し声が漏れ聞こえる。

同・栄子の部屋

椎、ノックし、中に入る。

横になったままの栄子、椎の方を向き

栄子「今日、仕事休むな」

椎「うん、電話してるの、聞こえた」

栄子「朝食作れんでごめんな」

椎「……あんだ、なんか食べたん？」

ベッド脇のゼリー飲料を指差し

栄子「あれと、薬だけ……」

椎「あたしのご飯作って、自分食わんでどう

いうことや……」

栄子「食欲なくて……」

椎、黙って台所へ。

x

x

x

部屋に戻って来た椎、ベッドの横に腰掛け、持って来た少量のたまご粥を栄子に差し出す。

栄子「作ってもらって、悪いな」

椎「エエから早よ食べ」

栄子はレンゲですくって冷ましているが

栄子「美味しそうやけど、後でもエエか？」

椎「食べな治らんわ」

椎、レンゲを奪い自分の口で冷まし、栄

子の口へ持っていく。

栄子「（口に含み）美味しい」

椎、栄子のパジャマが汗ばんでいることに気付く。

椎「食べたなら、着替えな」

椎、リビングへ。

栄子、本当に美味しそうに完食する。

栄子「ごちそうさま（と手を合わせる）」

椎、水を張った洗面器とタオルを持って戻って来る。

栄子「（冷えピタを指差し）これしとるから、タオルはええよ」

椎「汗。風呂入れへんかったやろ。脱いで」

栄子「……エエよ。後で着替えとくから」

椎「あかん。早よ脱ぎ」

栄子、戸惑っていると、椎は待ちかねて栄子のパジャマのボタンを外していく。

栄子「汚いから触らんで」

椎「エエから」

栄子「アカンて！」

椎、手を止め、黙って栄子を見つめる。耐えかねて視線を外した栄子、自ら上着を脱ぎ、胸が露わになる。

椎、タオルを絞り、丁寧に栄子の体を拭

いていく。

椎は栄子の片腕を上げ脇を拭こうとするが、栄子とはつさに脇を閉める。

椎「……ほら（と促す）」

栄子「風呂入ってへんから、臭うわ」

椎「……エエから」

椎は無理矢理栄子の脇を上げ拭いていく。それを受け栄子、口をへの字にする。

椎「暑いな」

と椎は自分の汗も同じタオルで拭い、続けて栄子の胸も拭こうと胸に手を触れる。栄子は抵抗しない。

椎、栄子の胸を持ち上げ、下の部分まで丁寧に拭く。

椎「……同じやな」

栄子「え？」

椎「あたしも左の方が大きいんよ」

椎、突然上着を脱ぎ、胸を栄子に見せる。

椎「な？ こっちの方が大きいんよ」

栄子、呆然と椎の胸を見る。

椎「同じ男にいじられてきとんのやから、似てもおかしくないか」

栄子「……ごめん」

椎「……ほら、下も脱ぎ」

栄子「そこは、ホンマにエエよ」

椎、聞かずにタオルを洗面器につけ絞る。

栄子、仕方なくパンツだけになる。

椎、足首から上へと拭いていく。

椎「なんでなん？」

栄子「……」

椎「なんで、徹と付き合ってたの？」

栄子「……分かん」

椎、再びタオルをゆすぐ。

栄子「徹さんだけやなくて夏樹くんも、今ま

でも全部、分かん」

椎「……」

栄子「氣い付いたら、椎の前の彼氏とばっかりで。自分でも言われて、そりゃ気味悪い、思う……」

椎、タオルを絞り終え、栄子に向き直る。

栄子「自分が自分のこと、一番分からん……」
椎「誰だってそうやる。でもあんたは、それをあたしに説明する責任が、あるんじゃないの？」

栄子、答えられない。

椎「あのバカに言われたわ。栄子はあたしが好きなんじゃないかって」

椎、目を瞑った栄子の顔全体を拭いていく。

それを受けていた栄子、目を開けると涙が伝う。

椎「……泣かれても、分からん」

椎、それも拭こうとするが、栄子はその腕を取る。

栄子、ゆっくり椎に上半身を近付ける。

椎、抵抗せず、唇が軽く触れる。

椎「……風邪、移す気か」

栄子「……ごめん」

椎、洗面器とタオルを置いて部屋を出る。

ラグアパ不動産への道（翌日・午前）

出勤中の栄子、山本と遭遇し、深々と挨拶する。

栄子「ご迷惑おかけしました」

山本「……もう大丈夫なの？」

栄子「はい、すっかり熱もなくなったので」

山本「……どう、体調も良くなっただし、仕事終わったらご飯でも」

栄子「食欲、まだ戻ってないんですよ。すみません、また今度」

山本「……ガード、固いんだね」

栄子「そうじゃなくて、友達も家にいますし。」

あれ？ 今日の夜は仕事だったかな？」

山本、足を止める。

少し進んだ栄子も足を止め、振り返る。

山本「……椎ちゃん、仕事変わったの、知ってる？」

栄子「え？」

山本「今夜、時間取ってもらえれば、教えるよ」

山本、それだけ言って栄子を追い越す。

栄子、山本の後を追いつつ

栄子「山本さん、どういうことなんですか？」

山本「それは仕事が終わった後にしよう」

栄子「でも……」

山本「（遮り）一応言っておくけど……」

山本、再度立ち止まり、栄子の方に振り向く。

山本「栄子ちゃんを誘うための口実とかじゃないから」

山本、再び歩き出す。

栄子、それ以上は何も言わず、後を追う。

ラグアパ不動産・店内（午後）

山本、いつも以上に八キ八キと接客をしている。

そこに栄子がお茶を持って来るが、山本は栄子と眼を合わせない。

栄子、壁掛け時計を見るも、まだお昼を過ぎた程度。

ちらりと山本を見た栄子、自分の席に戻る。

同・店外（夜）

山本が店の鍵を閉め終え、待っている栄子の元へやって来る。

山本「……ついて来て」

山本、栄子を置いて歩き出す。

栄子、無言で山本の後を追う。

風俗街

栄子を連れた山本、「チュツパチャップス」の前で止まる。

山本「ここ……」

栄子「……」

すると、客を見送りに店から椎が出て来る。

栄子「椎！？」

その声に椎、栄子の方に振り向く。

栄子「……どうということ？」

椎「職場までいちいち報告せなあかんのか？」

栄子「……徹さんやね？」

椎、答えない。

栄子「お金なら私が代わりに払うから、すぐ辞めて」

椎「……あたしがどこで働こうが勝手やる」

栄子「椎やって徹さんと別れた方がエエ、言うた」

椎「別れてへんやない」

栄子「別れるよ。だから椎もすぐ辞めて」

栄子、その場で徹に電話をかけるが、近付いて来た椎は携帯を奪い、地面に叩きつけ、椎は店の中へ戻っていく。

栄子はその場から動けない。

それを見ていた山本、携帯を拾い、栄子に渡す。

山本「大丈夫、画面も割れてないよ」

栄子、差し出した山本の手を取り、強引に歩き出す。

ラブホテル・室内

山本、ベッドに腰掛けさせられている。

立ったままの栄子は山本に背を向け

栄子「どうして椎が仕事変わったって、知ってたんですか？」

山本、答えられない。

向き直った栄子、山本の前に跪く。

栄子「どういうことをする仕事なんですか？」

山本「……やっぱり帰ろうよ」

栄子「逃げないで下さい」

山本、観念してズボンを脱ぎ出す。

山本「パンツを脱がせて、口で……」

栄子、山本のパンツを脱がす。

栄子「椎と同じことしますから、違ったら教えて下さい」

山本「……変だよ、栄子ちゃん」

ためらいもなく栄子はくわえる。

山本、栄子を見つめながら

山本「俺、栄子ちゃんのこと、好きだよ。でも、全然嬉しくない。情けないよ」

栄子「……」

山本「何か言えよ！」

山本、栄子をベッドに荒々しく引きずり込み、胸にむさぼりつく。

無表情のままの栄子、天井を見つめ、されるがまま。

栄子「……こんなこともしたんですか？」

山本「私とやったって言えば栄子ちゃんと付き合えるって、どういうことなんだよ！」

栄子「……同じことをして下さい」

山本「ああ！」

叫ぶや否や山本、荒々しく栄子の服を剥ぎ取っていくも、栄子の表情は冷めたまま。

その表情を見た山本、急に冷静になり、体を離す。

山本「ごめん、俺、最低だ……」

栄子「……私こそ、ごめんなさい」

山本「ごめん……」

栄子「……私たち、似てますね」

山本「え？」

栄子「謝ってばかり。椎に言われたんです。

なんであんたはそんなに謝るんだって」

山本「……それ、俺も椎ちゃんに言われたよ」

栄子「それが申し訳なくて、またごめんって、

謝っちゃうんですよね」

山本「……どうして、椎ちゃんと同じことを
したがるの？」

栄子「……」

山本「椎ちゃんのが好きだから、そうす
るの？」

栄子、急に不機嫌な顔になって離れる。

栄子「分からないの！」

山本、ムキになった栄子に怯える。

栄子「分からないから困ってるんでしょ！」

山本「ごめん……」

栄子「なんで謝るんですか！」

山本「……ごめん」

栄子「……椎が好きなんて、そんなのありえ
ない」

山本「……本当に俺達、似てるね」

栄子「え？」

山本「俺は栄子ちゃんに気持ちを伝えるまでに、随分時間がかかった。栄子ちゃんは、まだ椎ちゃんに、伝えてないんでしょ？」

栄子「……」

山本「そういうところも、似てるよ」

栄子「似てないです……」

山本「自分の気持ちをはっきり分かるだけ、俺の方が楽だけどさ」

栄子「……」

山本「考えても意味ないよ。本当はもう、分かってるんでしょ？」

栄子「……分かりたくないです」

山本、ベッドから立ち上がり、服を着始める。

栄子、それを見つめながら

栄子「山本さんは自分の気持ちが分かるのに、帰るんですか？」

山本「今の栄子ちゃんと一緒にいても、全然

嬉しくない。それが自分の気持ちだよ」

栄子「最後まで、椎と同じように、して下さ
い」

山本、テーブルの上に一万円札を置いて
部屋を出ていく。

× × ×

いつの間にか眠っていた栄子。

携帯を手に取り時間を確認すると、朝の
七時。

すると画面に「伊藤彰子」からの着信表
示が。

栄子「もしもし……」

ラグアパ不動産・外（翌日・午前）

ふっ切れた表情の栄子、店の外を掃いて
いる。

そこに碇店長が出勤して来る。

挨拶を交わした後

碇店長「今日は山本君が体調不良で休むそう
だから、色々頼むね」

それだけ言って碇は中に入っていく。

栄子、携帯で山本に電話をかけるが、留守電になる。

栄子「栄子です。昨日は、ごめんなさい。明

日はちゃんと出勤して下さいね……私も今

日……」

そこで応答時間が過ぎ、切れてしまう。

ピンサロ「チュツパチャップス」・控室

(夜)

椎、タバコを吸っていると神妙な顔で男

店長が入ってくる。

椎「どうしたんですか？」

男店長「指名はどんな客でも断らない。ウチ

のルール、覚えてるよね？」

椎、タバコを灰皿にもみ消しながら

椎「障害者でも来たんですか？」

男店長「行けば分かるよ」

椎「娼婦なんで、誰でもいいですけどね」

椎、控え室を出て行く。

同・店内

椎、中に入ると、栄子が座っている。

栄子「お金払えば誰でも平等にサービスする
んやてね」

動じず椎、栄子の前に来る。

椎「……どうすればエエ？」

栄子「（回りに客がいないのを見て）脱いで」

椎、静かに上着を脱いでいく。

栄子「全部やよ？」

椎、言われた通り全裸になる。

栄子「……椎のアソコが見たい」

椎、座ってゆっくりと股を開いていく。

床に跪いた栄子、大事そうにしげしげと

椎の部分を見る。

椎は栄子を冷めた眼で見ながら

椎「あんた、狂つとるわ」

しかし栄子が指で触れると、椎は思わず
びくつとなる。

栄子「体拭いてくれたやる？ あれ、今まで
生きてきた中で、一番嬉しかった」

栄子、椎を首から下へと愛撫していく。

椎、声を出さないようにじっとしている。

栄子「なんで急にあんなことしてくれたの？」

椎「……分かんらん」

栄子「それ、説明する責任は、ないん？」

一通りの愛撫を終えた栄子、椎の股間に顔を埋めようとする。

椎「！」

栄子「椎は、ここはやってくれへんかった」

栄子が責め始めると、椎の顔が赤らむ。

それを見た栄子、顔を離す。

栄子、椎と入れ替わろうと服を脱ぎ、全

裸で椎の横に座る。

栄子「私、やっと分かったんよ」

椎、栄子の方に顔を向ける。

しかし栄子は椎の眼を見ることが出来ず、

横を向く。

栄子「……ほら、代わって」

椎、床に跪き、栄子の茂みの前に顔を持つていく。

栄子「恥ずかしいな、いくら客やいうても」

椎は栄子に触れ、同じように首から下へ

舌を這わせていく。

栄子、冷めた顔で

栄子「ずっと椎のことが好きやったんやって、
やっと分かった」

椎は無言で愛撫を続ける。

栄子「アホやる？ それに気付くのに、十年
かかった」

椎、愛撫を終え、再び栄子の茂みの前ま
で顔が来る。

栄子「自分でも分からなかった。気付きたく
なかつたんやな」

椎「……ごめん」

栄子「なんで謝るん？」

椎「……」

栄子「私、間違ったことしとうなかつたんや
ろな」

椎「……間違っではないよ」

栄子「……」

椎「間違つてへん……」

椎、それだけ言つて、下を向く。

栄子、それ以上は何も言わず、服を着て店を去る。

栄子のマンション・リビング（空き部屋

）玄関（深夜）

椎が帰つてくると、栄子が椅子に腰掛けタバコを吸っている。

椎、栄子の対面に座り、椎もタバコに火を点けようとする。

栄子、椎にマッチを擦り、椎はそれを無言で受ける。

栄子、テーブルの上に置いてあつたバッグの中から封筒を取り出し、椎に差し出す。

栄子「これで足りるやろ？ お店、辞めた方がエエよ、やっぱり」

椎「さつき辞めて来たわ」

椎、封筒を栄子に押し返す。

栄子「なら、このお金で、出てっしてくれへん？」

栄子、再び椎の前に封筒を出す。

椎「あたしもそれ言いに来たんや。すぐ出てく。でも、要らん」

再び栄子の前に封筒が戻ってくる。

椎「むしろあたしが払わなあかんくらいや」

椎、自分の（空き）部屋に向かい、キャリーバッグに荷物を詰め始める。

栄子、テーブルの上に置いた封筒を見つめながら

栄子「今朝な、母親から電話あつてん」

椎「（作業を止めずに）……うん」

栄子「見合いせえ、言うてきた」

栄子、タバコを灰皿に押し付け笑みを浮かべ

栄子「いよいよ灰皿に蓋されてまうわ」

椎、キャリーバッグを持ってリビングに戻ってくる。

栄子「せやから最後に、好きな子に好きって言いたなつた」

椎「……」

栄子「私の初めての、ホンマの告白、女の子に
にするとは思わへんかったわ」

椎、栄子の顔から視線を逸らし、キャリ
ーバッグを玄関に置く。

栄子「(その背に)私のこと、嫌いになった？」

椎「……嫌いでも、好きでも、ないわ」

栄子、玄関で靴を履いている椎に近づい
ていく。

椎の背後に立ち、肩越しに封筒を差し出
して

栄子「受け取って」

椎「要らんで」

栄子「……じゃあ、これで延長料や」

椎、振り向く。

栄子「さっきまだ、途中やったやる？」

栄子、自分の部屋のベッドに向かって歩
きながら、服を脱ぎ棄てていく。

椎、その様子を見て

椎「ひとつ、約束するか？」

栄子「……何？」

椎「あんた、もうタバコやめ。似合わん」

椎、靴を脱ぎ、玄関から栄子の部屋に進みながら同じように服を脱ぎ棄てていく。

同・栄子の部屋

栄子と椎、ベッドの前で全裸で向かい合う。

椎「これは、仕事やから。娼婦の、最後の仕事やから」

栄子「うん、仕事で頼んでる」

栄子、ベッドに腰掛け股を開く。

椎、跪き栄子の股に顔を近づけるが、突然立ち上がり、栄子をベッドに押し倒す。

驚く栄子に構わず、椎は栄子に優しくキスをする。

軽いキスを数回繰り返した後、舌を絡ませ、椎は栄子を責めていく。

栄子、全身で感じていく。

同・リビング（台所）玄関（翌朝）

ごはん、みそ汁、焼き鮭、卵焼きが並ぶ
テーブル。

向かい合って座る栄子と椎、無言でそれ
らを黙々と食べている。

栄子「……そういえば康子、結婚するみたい
や。覚えてる、康子？」

椎「あのおとなしい子やる？」

栄子「なんか、子供、出来ちゃったんやて」

椎「また似合わん展開やな」

栄子「相手、会社の上司やて。その人、奥さ
んいたらしいけど」

椎「はあー」

栄子「会社でも大騒ぎやったけど、結局離婚
して一緒になるて」

椎「分らんなあ、誰が何しでかすかなんて」

二人、顔を見合わせ笑う。

椎「はあー、ごちそうさま」

と椎が食べ終わり、箸をテーブルにおい
て慇懃に手を合わせ、頭を垂れる。

栄子「洗うとくから置いといて」

椎「……最後までスマンな」

栄子「（微笑み）最初と逆やね」

椎「え？」

栄子「椎が謝るようになった」

椎「ホンマやな。スマン。あ」

二人とも笑う。

栄子も食べ終わり、椎の分と共に流しに皿を持っていき、洗い始める。

栄子、そのまま手持ち無沙汰で座っている椎に

栄子「先出てエエよ。私、化粧もまだやし」

椎「いや、エエよ。悪いし」

栄子「（笑い）これ以上一緒におるとな、別れにくい、いうこと」

椎「……分かった」

椎、立ち上がり玄関に向かい、靴を履き始める。

椎「見合いでするいうても、まだ結婚するわけやないやろ？」

栄子「いや、決まりやね。先方はもう了承し
とるし」

椎「……そうか。モテるんやな」

栄子「自分が一番好きな人には、モテへんか
ったけどな（笑う）」

椎「（涙混じりに）なんやろな」

それが聞こえた栄子、振り向かず、水道
の蛇口をより大きく開く。

椎「栄子のこと、自分も、なんも分からん」

栄子「……これも最初と逆や」

椎「……ごめんな」

栄子、眼を瞑り、歯をギュツと噛み締め
た後、笑みを浮かべ

栄子「私こそ……ありがとう」

椎、キャリーバッグに手を付きながら立
ち上がる。

栄子「今日暑くなるて。もうすぐ夏やな」

椎が何も答えず玄関を出て行く音が聞こ
え、栄子はゆっくりと開いた蛇口を閉め
る。

W 大学・キャンパス・内へ校門（数日後・
昼）

椎、キャンパスの中から門に向かって歩いて来ると、門の側に徹が待っているのに気付く。

徹「呼び出しといて待たせるなよ」

椎「引越し、済んだ？」

徹「荷物なんて服とパソコンくらいしかねえよ」

と徹、ポストンバックを持ち上げて見せる。

椎、徹の前に掌を差し出し

椎「鍵」

徹、黙って鍵を渡した後、椎の肩に手を回す。

徹「本当にいいのか、俺がいなくなっ」

椎「（笑い）行くところなくて困るのはあんたでしょ」

徹「元鞘でもいいんだぞ？」

椎「……ちゃんと小説、書きなよ。これ、二

人からの饒別」

と椎、栄子から受け取った現金の入った封筒を渡し、去る。

ラグアパ不動産・店外（夕方過ぎ）

花束を持った栄子が店から出てくる。

駅に向かい少し歩いていると、山本が外回りから帰ってくる場所に鉢合わせる。

栄子「色々とお世話になりました」

と深々とお辞儀をし、山本もそれに合わせ頭を垂れる。

栄子、背筋を伸ばし

栄子「山本さん、私、自分の気持ち、殺して
たんです」

山本「……うん」

栄子「いつも、自分で人生を選んでいる感じ
じゃなくて、こうすれば間違いないんだな
って、そうやって生きてきたから」

山本「……お見合いでするのも、自分の意思
じゃないでしょ？」

栄子「私の意志ですよ。私は、おとなしく結婚するんです」

歩き出す栄子に山本、栄子の正面に回つて来て、栄子の手を掴む。

山本「僕じゃダメかな？」

栄子「え？」

山本「僕は栄子ちゃんが、本気で好きなんだ」

栄子「……ストレートだなあ（と笑う）」

山本、掴んでいた手を離し、栄子の前に改めてその手を差し出し、お辞儀をして下を向き

山本「僕と結婚して下さい！」

栄子「……やっぱり私たち、似てますね」

山本、頭だけ栄子の方に上げ

山本「え？」

栄子「お互い、好きな人とは絶対に結ばれない運命なんですよ」

山本、上半身を起こす。

栄子「自分で変えられるものもあればそうじゃない、変えない方がいい運命もあるんで

すよ、きつと」

栄子、一礼をして山本から離れていく。

田舎の町並みが流れていく（数日後・午後）

栄子、タクシーの窓から風景を眺めている。

栄子「ここで大丈夫です。少し歩きたいので」
その声でタクシーが止まる。

田舎道

栄子と荷物を残し、タクシーが走り去る。

栄子、キャスターと「ラブタイム」のマ
ッチを取り出す。

栄子、それらを見つめて握りしめ、タバ
コを取り出しマッチを擦る。

口にくわえ、煙を静かに吐き出す。

栄子、煙が風に消えていくのを静かに見
ている。

了